

雲間から見る
— 日本的思考による「隙間」と「雲」の生成 —

21919005 岩城 瑛里加
指導教員 宮 晶子 教授

時間	記憶	日本的思考
再開発	高密度	都市

1 序論

多くのせわしない流れが絡み合う都心部において、自分の動きが周囲からずれていると感じるときがある。目的地までの街路を人の流れにぶつからないように必死で歩くとき、私は意識の向く範囲を狭める。そんなとき、周囲の音やようすは自分の内側には入ってこない。そして、ただひたすらに目的地を目指す。

都市での生活は、人々を目的的に過ごさせてきた。目的地を目指して移動することは、自分の目的に向かっていくようで自分自身の位置や存在を見失っているとも言える。また、電車で通勤・通学するとき、多くの人々は携帯機器を片手になにか目的を探そうとしているようでもある。だが、これでは意識のみが先行し、身体が伴うことはない。

人は「気づく」瞬間に自己の内側と身体の外側とを結びつける。外的環境・事象に対して、「気づく」ことによって、思考し、記憶に刻まれる。地域の固有性が薄まり、「場所」としての固有性が失われた現代において、このように身体の外側から精神へと作用する「気づく」ことは、自分自身を自然環境や街路や都市と結びつける動きである。個人主義が強まる社会において、さらに着々と進む都心の開発のなかで、自分自身の存在を見失わないために必要な動きである。

実際に都市のなかではと「気づく」ができる瞬間もある。ビルや住宅地の間を通過していた電車の車窓から、開けた河川が突然見えたとき(図1)、人は視界の変化によってそちらへと意識が向かう。さらに、その河原にかつて降り立ち電車を眺めた記憶がある場合(図2)、今の自分が見ている景色とかつての自分が見た景色が相互に作用し、2つの地点に存在している「私」が移り変わる。

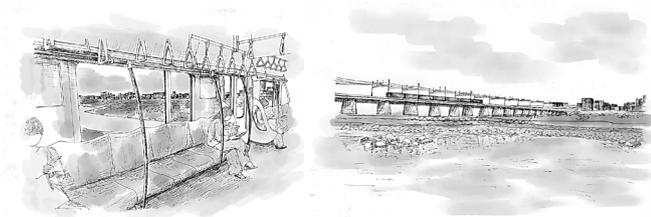


図1 図2 記憶を介して現在と過去の自分の意識が混ざり合う

2 時間的に俯瞰する経験

脳科学によると、人は外部刺激によって知覚を得るとまず情動として反応が表出し、そして心を通して感情となる。この情動から記憶への流れを空間に取り入れることで、過去と現在の自分の経験を思い起こし自分の存在までも対象化して認識することを促す。

3 日本的思考に表れる時間と空間

戦前の日本では自己の内側である精神と身体の外側とを結びつけ、自分の存在を対象化して捉えるための操作が日本建築や日本画といった文化の中に自然と取り込まれていた。そのために、人間はその精神の中で軸を持って地球上に存在し、他の事象を感じながらも自分自身を中心に世界を捉えていた。

東洋史学者の山崎宏著の『日本画と日本建築の時空』(※1)によると、日本人は様々な規模の地震経験を幾度も繰り返すうちに、心の拠り所は地球の中心へと向かった(図3、図4)。滝の垂直落下に神聖さを感じ、座禅によって心身を地球の中心と一直線に結びつける。このような垂直性の追求からは、人間の無意識領域を心理的に捉えようとしていたことを感じることができる。中心の存在は地球の核一つであるから、地上世界のすべては「等価」であり無中心である。この思想は、高床式住居の浮遊感や雁行型の建築の水平指向(図5)、そして襖障子に描かれた日本画のいくつもの視点などに表れている。

多方向からの鑑賞の視点を可能にする日本画は、かつて絵画というよりも建具としての存在の方が強かった。絵が描かれていた屏風や襖障子は見る者の足下の延長線上から立ち上がっていることで、見る者と対等に対峙していたと山崎氏は述べる(図6)。瞬間の活動を切り取り描く日本画は、幾つもの場面が連続して一枚の画面に描かれていく。部分で描かれたものが金雲を介して同時に存在し、全体を構成する(図7)。

以上のように日本的思考の基盤には、部分重視の傾向があり、部分の連続によって全体が形づくられていく。同様に、各部分が同価値で存在するため、全てが「等価」であり、つまり全体は中心を持たない。さらに、人が等

価な多数の存在の一部になるとき、身体を通して時間を超えて事象を俯瞰的に意識する。例えば、桜の舞い散る様を見ているとき、人は過去の桜を見ていた自分の経験を思い起こす。

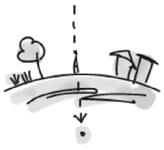


図3 不安定な地盤により地中へ安定を求め

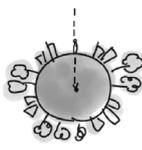


図4 精神の中心は地球の中心へ

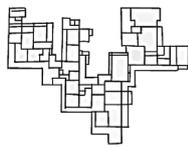


図5 雁行型の建築 (桂離宮の平面)



図6 対峙する屏風と身体



図7 浴中浴外図に表れる「雲」



図8 等価なものの一部になる経験

4 設計提案

都市において、土地の区画の縁に高層のビルが立ち並びガワに対して、その内側の低層の木造密集地が広がる地帯はしばしばアンコと呼ばれる。アンコでは独特の雰囲気を持つ木造住宅が細い路地の両側に連続して並ぶ。その通りは、静かながらも住人の活動する音や生活の道具などが垣間見え、他者の存在を常に感じる場所となっている。

4.1 対象敷地

敷地は東京都新宿区神楽坂の坂上、賑わいをみせる通りを越えて落ち着いた日常が営まれる地域に位置する。このエリアは飯田橋駅と神楽坂駅とを結ぶ通りなど3つの大きな道路が交差した内角にある。そして、大通りに沿って高い建物が建ち並び、それらの内側、通りから奥に入っていくほど低層の木造住宅が密集する日本の都市特有の特徴を有する場所である。

近代、そういった木造密集地は再開発の対象地として次々に姿を変えている。高密度化が必須となった都心部において、木造密集地は一掃され公開空地と超高層ビルが建つという再開発が多く行われる。そんな現代の再開発に対して、元の木造密集地の魅力を残しつつ、外部環境や他者との結びつきを持ち合わせる高密度化・高層化の在り方を日本的な思考による境界の曖昧さを参照しながら考える。

4.2 プログラム

対象敷地の一角、2つの大きな通りに挟まれた角地を計

画する。周辺には通りに沿ったビルが建ち、料理店や菓子屋などテナントが入っている。それらの裏となっている当計画地に、3つの用途を入れ込む。

ビルに接するエリアにはテナントの入る空間を設けることで、表通りの活気を路地、そして室内まで引き込む。計画地の中心側は集合住宅とし、室内空間と屋外空間がズレを有しながら連続的に展開する。そして、上階にはワーキングスペースを入れる。今後オフィスという存在がなくなっていくことを想定し、ワーキングスペースでありながらテナントが入り、集合住宅の生活が溢れだす。そんな用途の境界が曖昧な建築空間の作成を目指す。

4.3 設計手法

日本的表現の代表である雁行型建築と日本画の「雲」を参照して、連続した活動の場に外部空間が断片的に入り込むことで、建築の内外をシームレスに繋げる。雁行型建築のズレを有する平面構成を手法として立体的に用いることで、多様な隙間やズレを高さ方向にも水平方向にも生み出す。また、それらの隙間やズレは同時に日本画の「雲」のようであり、「見える・見えない」の関係性を生じさせると共に全く異なる用途の空間を隣り合わせることをも可能にする(図9,図10)。

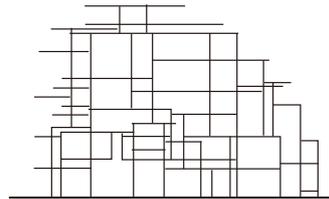


図9 断面に表れる高さ方向のズレ

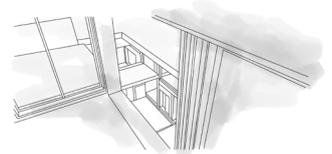


図10 床のズレによる「見える・見えない」の経験

そして、機能で領域分けをするのではなく、仕事も生活の一部となり、様々なものが距離を保ちつつ、雲間に混ざり合うことをこれからの建築の理想として考える。アンコは大きさが少し違うものが混ざり合っている栗入りの小倉餡のようになり、都市の様相を優しく変えていく。雲間がいろいろなものを隔てながらも繋いでいくように、個人の精神と身体、そしてその外側を取り巻く事柄が障壁なく結びつき、人と人、人と自然、そして人と都市が相互に作用していく中心となる建築を設計する。

[主要参考文献]

- ※1 山崎 宏、『日本画と日本建築の時空』青山社, 2011
- ・加藤 周一、『日本文化における時間と空間』岩波書店, 2007
- ・アントニオ・R・ダマシオ著, 田中 三彦訳『感じる脳』ダイヤモンド社, 2005